

テクニックのディテール

—インテリジェント・ダンシングをめぐる—考察—

野本 昌

ダンサーを評価する視点には様々な要素が考えられるが、バレエダンサーの場合はテクニックがその一つに挙げられる。Edwin Denby は『Meaning in Ballet』の中でダンサーが音楽やストーリーと関連しある意味を作り出しているのを見て取れると述べている。そして、ダンサーを評価する基準をインテリジェント・ダンシングという言葉を用いて説明している。彼によると、それは正確なダンスということのほか、ダンサーがほかの人々と異なった自分自身であるということであるという。そのダンサーの動きが身体や個人の衝動にぴったりとあっているように同時発生的で、それらがまさに動きを作り出しているかのようなことがダンサーのオリジナリティーだということだ。それはコレオグラフィーのオリジナリティーとはかなり異なると述べている。また、バレエのテクニシャンは身体の勢いの制御を失うことなしに動きの原動力を変化させる方法を出来るだけ数多く見つけたがっていると述べ、バレエダンサーにとってのテクニックの重要性を指摘している。更に、ダンサーの表現とはそのダンサー自身の意見や心理やポリシーやモラルではなく、自分の身体を動きのなかでどう見せるかということであると語っている。

自分の身体の見せ方とは、単に動きという次元にはとどまらない。バレエ作品の多くが音楽と密接な関係を持っていることから、音楽と振付をどのように合わせるかということもダンサーの身体の提示の仕方の一つである。振付家や芸術監督から細かい指示が出されたとしても、その最終判断はダンサーにゆだねられているのである。個々のダンサーのオリジナリティーは何回回ることができるとか、脚がどこまで上がるといった目に見えるテクニックの他にもこうしたところに現れてくるものである。それは、個々のダンサーがもつ“リズム”といってもよいかもしれない。このときリズムとは拍子というよりは、“タイミング”とか“間”と考えられるものである。ダンサーが身体を操作する上で“パ”の習得と同質のものである。そしてこのリズムが刻まれるのが足の裏によってである。特に指の付け根あたりからその起こしによって作り出される動力で、ダンサーは床を蹴りまたはつかんで様々な動きを実現する。ここで音楽を聞くことができ、自在にあやつることのできるダンサーは自らの動きのリズムと音楽とを合わせることに成功する。どんなパであっても

まず足を踏み、蹴らなくては始まらないのである。また、バレエダンサーのつま先が美しく伸びているのもこのためである。パを美しく成功させ、思うように音楽と調和させるというダンサーに必要なことを足の裏は担っているのである。

この足の裏の重要性はバレエのクラスを見ることにより証明できる。バレエのクラスは長い伝統のなかでトレーニングのシステムとして確立した合理的なものである。それがプリエという足の裏を意識して床を感じさせる動きから始まることは、それがどんな動きにも先立って重要であることの何よりの証である。更に、さまざまな形で足の裏を使う訓練のために、バーでの稽古にはタンデュ、ジェテ、フラッペ、バットマンなど実に多くの動きが組まれている。

このようなテクニックのディテールがダンサーを支配しているのは確かであるが、実際には体験的に修得し、身体が知っているという状態になっているはずだ。なぜならば、そうすることによって初めてそのテクニックを使って踊ることができるのであるからだ。インテリジェント・ダンシングとはダンサーの側からいえば、テクニックのディテールを身体で記憶するということになる。振付家でも、作曲家でも、ダンサー自身の表現の中心はそこにあるといえるからだ。そしてだからこそ、インテリジェント・ダンシングがダンサーを評価する基準となるのである。